

令和六年四月五日 監査懇話会

『源氏物語』の時代——大河ドラマ「光る君へ」の歴史背景——

京都先端科学大学 山本淳子

紫式部の『源氏物語』が藤原道長の後援による作品であることは、よく知られています。では、道長はなぜ『源氏物語』を後援したのでしょうか。また、紫式部はこの物語で何を伝えようとしたのでしょうか。背景となった歴史の一端をお話します。

一 『源氏物語』

【源氏物語】桐壺（冒頭）

いづれの御時おんときにか、女御にようご、更衣あまた候いひまちひたまひける中に、いとやむごとなき際にはあらぬが、すぐれて時めきたまふ、ありけり。初めより、我はと思ひ上がりたまへる御方々、めざましきものにおとしめ、そねみたまふ。同じほど、それより下臈げろうの更衣たちは、ましてやすからず。朝夕の宮仕へにつけても、人の心のみ動かし、恨みを負ふ積りにやありけむ、いと篤あつしくなりゆき、もの心細げに里がちなるを、いよいよ飽かずあはれるものにして、人の謗そしりをもえ憚はばかりらせたまはず、世のためしにもなりぬべき御もてなしなり。

（大意）

どの帝みかどの御世みよであつたか。女御にようご・更衣こういなどきさきが居並ぶ中に、そう最高の家柄けがらではなくて、抜きんでてご寵愛ちゆうあいを受けている方がいた。

最初から「我こそは」と自負みづかしていらつしやったきさき達は、この思いのほかの邪魔者を見下し、また妬ねたまれる。同じ身分やそれ以下の更衣たちはまして穏やかではない。朝夕の帝へのお仕えにつけても、ただただ人の心を動揺させ恨みを買ふことばかりで、やがてそれが積もり積もったのだらう、ひどく病気がちになつて、心細そうに実家に帰つてばかりいる。すると帝はますます恋しくいじらしいものとお感じになつて、周囲の非難を気にすることもできず、全く世間の語り草にもなりそうなご寵愛である。

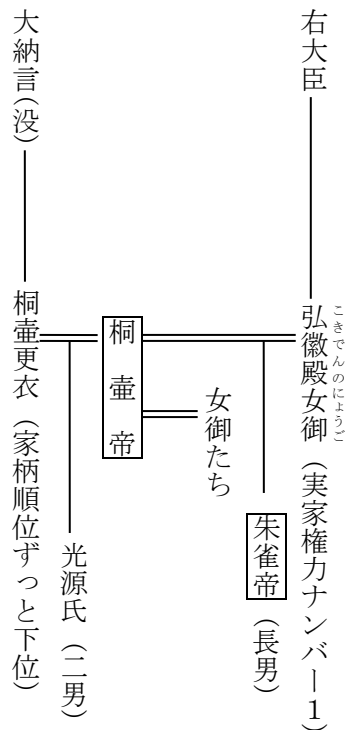
【参考】藤原克己《座談会》「源氏物語のことばへ」『文学』二〇〇六年九・十月号）

■『源氏物語』に繰り返し描かれる愛のパターン（概要）

- ① 女はもと高貴な血筋であるが、親が亡くなるなど後見もなく不安定な境遇にある。
- ② 男は、そのような境遇にある女に、世俗的な利害打算から自由な純愛を流露させる。
- ③ 女も、そのような男の愛情が胸にしみているが、しかしその男の愛情以外によりずがるものがない境遇にあるだけに、いつそう深刻な愛の不安を経験しつつ、ついに亡くなつてしまう。が、その最期に、女も男を「あはれ」と思う心情を全面的に流露させる。
- ④ あとに残された男は、女の面影を恋い慕いつつ、尽きることのない悲しみにくれ惑う。

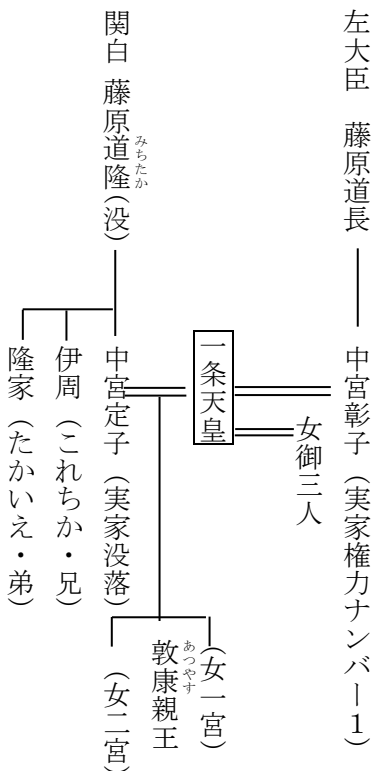
【二】『源氏物語』の光源氏の母・桐壺更衣は実話か

(物語内系図)



摂関政治下、天皇にとって結婚は公務。
桐壺帝…公務より私情(愛)を優先Ⅱ実家の無力な桐壺更衣を寵愛
↓貴族社会批判↓
桐壺更衣没

(史実系図 西暦一〇〇〇年現在)



一条天皇…公務より私情を優先Ⅱ実家没落・出家離縁した中宮定子を寵愛
↓貴族社会批判↓
定子没

◆愛と悲劇の後・定子と『枕草子』・『源氏物語』略年表

は桐壺との共通要素

990 (正暦元)	一条天皇 11、定子 14 と結婚。定子、「中宮」となる
993 (省略四)	★清少納言 28？定子 17 に宮仕え
995 (長徳元)	定子 19 の父関白道隆 43、死亡。代わって弟の道長 30 が最高権力者に。
996 (長徳二)	5月 定子 20 の兄弟、大罪により流刑。定子、懷妊中なるも絶望し出家。 ★第一次『枕草子』(随想など) 執筆開始
997 (長徳三)	6月 一条天皇 18 定子 21 を復縁。「天下甘心せず」 貴族ら批判
999 (長保元)	2月 藤原道長の娘の彰子 12、一条天皇 20 に入内決定。 貴族社会からいじめ
	2月 定子 23、二度目の懷妊
	11月 1日 彰子、一条天皇に入内。
	11月 7日 定子、一条天皇の長男・敦康親王を産む 皇子を出産
1000 (長保二)	12月 定子 24、一条天皇 21 の女二宮を生み、崩御。 死亡
1001 (長保三)	●4月 紫式部、夫と死別
一一、三年後か	★清少納言、第二次『枕草子』(定子回想録か)を執筆・流布
	●紫式部、原『源氏物語』(恋愛ヒーロー短編か)を家で執筆
1005 (寛弘二)	●紫式部、彰子 18 に宮仕え(この前後、『源氏物語』長編化)

■定子と桐壺更衣の辞世（この世との別れの和歌）の符合

【実】『後拾遺和歌集』卷十 哀傷（定子辞世三首のうち一首）

「⁵³⁷」 知る人も 無き別れ路に 今はとて 心細くも 急ぎたつかな

（大意）この世と別れ、知る人もいない死の世界へ、今は行かなくてはなりません。心細いけれど、急いで旅立つのです。

【物】『源氏物語』桐壺（桐壺更衣辞世）

限りとて 別るる道の 悲しきに いかまほしきは 命なりけり

（大意）もうおしまい。お別れして、行かなくてはなりません。でもその死出^{しで}の道の悲しいこと。行きたいのは、生きたいのはこんな道ではありません、私は命を生きたいのに。

【三】藤原道長はなぜ『源氏物語』を後援したか？

■定子の死の記憶は時代の共有する記憶となり、社会は心の傷を抱えた。

- ① 藤原道長、怨霊体験から恐怖におののく
 - ② 貴族層、罪悪感から定子に一転同情
 - ③ 若者層、無常観から連鎖的出家
 - ④ 一条天皇、定子への追慕
- ↓
定子の鎮魂急務
↓『枕草子』定子回想録、排斥されず
↓道長側からも作品提供、補強の要

史料①【権記（藤原行成日記）】長保二年十二月十六日（定子崩御当日）道長の言

■定子崩御の当日、道長は定子の父・道隆らの怨霊に襲われる妄想を抱いた。

（大意）

「藤^{とうの}典^{ない}侍^{すけ}の靈^{れい}氣^{いき}を帯びた様子は普通ではなかった。…女房たちが驚く声で私が振り向くと、藤典侍が□を手に捧げ持ち、つかみかろうと襲^{てい}ってきたところであった。その体は、垂れ髪が更に逆さまになり、大きく□を張り、放つ音は人の耳を驚かせた。私はたまたま仏法僧三法の加護^{かご}を得てその靈の左右の手をつかむことができ、引き据えた。

何^{なん}刻^{こく}か経^へって思ったが、その□は、最初に何か言ったのは関白（長兄道隆・定子の父）の靈のようだった。また二条の大臣（次兄道兼）の言葉にも似ていた」

史料④【後拾遺集】哀傷 五四三番歌

長保二年十二月に皇后宮うせさせ給ひて、葬送の夜、

雪の降りて侍りければ遣はしける

一条院御製

野辺までに 心ひとつは 通へども 我が「みゆき」とは 知らずやあるらん

（大意）

長保二（一〇〇〇）年十二月に皇后の宮（定子）が亡くなって、葬送の夜、雪が降っ

ていたので詠みおくれた歌

一条院の御歌

定子、あなたが運ばれた鳥辺野の墓地まで、天皇である私はついて行くことができない。でも心だけは一緒だ、傍にいますよ。あなたを包む深雪は、帝である私の外出を言う行幸なのだ。だがあなたは、もうそれさえ分らないで眠っているのだね。

〈参考〉清水婦久子『源氏物語の巻名と和歌 物語生成論へ』和泉書院、二〇一四

・桐壺巻の役割の一つは、亡くなった人の鎮魂であったと思う。…史実をモデルにしたというより、むしろ天皇をなぐさめる意図で、よく似た境遇の主人公を作ったのだろう。…哀傷・鎮魂の物語を作れば、愛する后を無くした天皇を慰めることと同時に、天皇の悲しみを理解できる若い后を育てることもできる。

④ 紫式部はなぜ『源氏物語』に定子を登場させたのか？

① 桐壺更衣、「モデルは楊貴妃」

【源氏物語】「桐壺」続き

上達部、上人などもあはなく1目を側めつつ、いとまばゆき人の御おぼえなり。「2唐土にも、かかる事の起こりにこそ、世も乱れ悪しかりけれ」と、やうやう、天の下にも、あぢきなう人のもてなやみぐさになりて、3楊貴妃の例も引き出でつべくなりゆくに、いとほしたなきこと多かれど、かたじけなき御心ばへのたぐひなきを頼みにて交じらひたまふ。

(大意)

公卿や殿上人なども、あるまじきことと一見つつ手をこまねき、実に正視に耐えない御寵愛ぶりである。「2中国でもまさにこうした事件があつて世も乱れ大変だった」と、だんだん世間も、これをどうにもならない悩みの種と見るようになり、3楊貴妃の例まで持ち出しそうになっていくものだから、更衣としては身の置き所もないばかりだが、帝の勿体なくも深い御愛情一つを支えに、後宮勤めを続けておられる。

- 1 楊貴妃を文学化した白居易の詩「長恨歌」の解説「長恨歌伝」の言葉「目を側だつ」
- 2 「唐土」＝中国の事件を持ち出す
- 3 楊貴妃の名を明示

② 「長恨歌」の成立と唐社会

【長恨歌伝】白居易の友人・陳鴻の作。「長恨歌」の解説と創作の経緯（関係箇所 大意）
元和元（八〇六）年冬十二月…（私たち三人、白楽天と陳鴻と王質夫は）話してこの話題に及び、共に感動した。王質夫は酒を楽天の前に挙げて言った。「そもそも、楊貴妃事件という希代の出来事は、傑出した人物が作品にして記し置かなければ、時と共に消え去り

社会に伝わらなくなってしまう。楽天は詩に造詣が深く、情の豊かな人物だ。だから、試しにこれを作品化してはどうか。それで楽天は「長恨歌」を作ったのだ。思うに、ただ感動しただけではなく、一方で傾城を懲らしめ、秩序の乱れを未然に防ぎ、将来の訓戒としようとしたのだろう。

■傾城Ⅱ世に禍を及ぼしかねない絶世の美女

■「長恨歌」には傾城と皇帝への批判という儒教的意図があったと「長恨歌伝」は言う。

③ 傾城だった？定子

■定子は生前、則天武后に喩えられ批判されていた。

【権記（藤原行成日記）】長保元（九九九）年八月十八日

江がくし江学士来たりて語るついでに曰く「白馬寺の尼、宮に入りて、唐杣（祚）ほろ亡びし由あり」と。皇后の内に入るを思ひて、内の火の事に旧事を引けるか。

（大意）

おおえのまさひら大江匡衡が来たついでに語ったことには「中国では、かつて尼である則天武后が後宮に入ったことで、唐の国が減びたとか」。彼は皇后定子様が後宮に復帰したことを原因と考えて、内裏の火事の事につき、中国の故事を引き合いに出したのだろうか。

■定子は生前、国家のためには有害の后と非難されていた。

【権記（藤原行成日記）】長保二年正月二十八日

我が朝は神国なり。神事を以て先とすべし。中宮は正妃たりと雖も、已に出家入道せられ、随ひて神事を勤めず。殊に私の恩有るに依りて、職号を止むること無く、封戸を全部納するなり。

（大意）

我が国は神国です。神事を第一とすべきです。中宮定子様は正当な妃ではありますが、已に出家入道されていて、神事を勤めていません。特別に、主上からの私的なご寵愛によって、中宮の称号も停止されず、国からの支給を丸取りしているのです。

④ 紫式部の方法

■紫式部は、桐壺更衣の造型に自身の問題意識を幾つも託した。

・『枕草子』の定子美化に反対：（後の『紫式部日記』清少納言批判へ）

・儒教的視点「風諭」（文学に託して権力を諫める方法）：（漢学者の父・藤原為時譲り）

・リアリズム「後見なき女の悲劇」：（『源氏物語』の主題の一つ）

・仏教的視点 愛という煩惱：（紫式部自身の喪失体験）

⑤ 一条天皇は怒らなかったのか？

■一条天皇は風諭を求めていた。

【本朝麗藻】御製「清夜月光多し」

席上の英才、宜しく露膽すべし 由来、風論は詩能に附きたり

(大意)

今宵、詩会に参会の優れた詩人たちよ。よくその自由な思想を発露しよう。
もとより「風論」の精神は、詩の才能に付き物ではないか。

■『源氏物語』は、やがて一条天皇の愛読書にもなった。

【紫式部日記】 消息体。記事内容は一〇〇八年頃のことか

うちの上の、源氏の物語人に読ませ給ひつつ聞こしめしけるに、「この人は日本紀をこそ読み給ふべけれ。まことに才あるべし」と、のたまはせけるを

(大意)

一条天皇は、源氏の物語を女房に朗読させてお聞きになりながら「この作者は公に日本書紀を講義してくださらずにかならないな。いや実に漢文の素養があるようだ」そう冗談交じりにおっしゃった。：

自分のため・世のために定子の魂を癒すと共に、彰子のために一条天皇を振り向かせる作品を欲していた藤原道長。一方、漢学教養を骨肉として問題意識を抱くと共に、愛別離苦の人生の浄化（カタルシス）を求めていた紫式部。定子に準拠した桐壺更衣を登場させる『源氏物語』は二人の共通の利益によって世に登場したと言えるでしょう。

〈参考資料〉

増田繁夫「源氏物語作中人物論の視角●主題として」学燈社『国文学 解釈と教材の研究』一九九一年五月）

高島要「清夜月光多し」注釈（本朝麗藻を読む会『本朝麗藻簡注』勉誠社、一九九三年

藤原克己《座談会》「源氏物語のことばへ」岩波書店『文学』二〇〇六年九・十月号）

後藤昭雄『大江匡衡』（吉川弘文館人物叢書、二〇〇六年）

山本淳子『源氏物語の時代』（朝日新聞出版、二〇〇七年）

清水婦久子（『源氏物語の巻名と和歌 物語生成論へ』和泉書院、二〇一四）

山本淳子『源氏物語』の準拠の方法——定子・楊貴妃・桐壺更衣——」小山利彦・河添房

江・陣野英則編『王朝文学と東ユーラシア文化』武蔵野書院、二〇一五年

山本淳子『枕草子のたくらみ』（朝日新聞出版、二〇一七年）

山本淳子『紫式部ひとり語り』（角川ソフィア文庫、二〇二〇年）

山本淳子「道長ものがたり」（朝日新聞出版、二〇二三年）